

応用言語学特講 文献研究  
就学前幼児の英語力に関する実態調査報告  
—通信英語教材の効果—

東京工科大学  
豊田ひろ子

ARCLE REVIEW No.4 (2010年3月20日)

## 1. はじめに

早期英語学習者の中に、自宅で学習用通信教材を用いて就学前に英語学習を開始する子どもたちがいる。そのような英語通信教材のひとつに(株)ベネッセコーポレーションの『こどもちゃれんじ English』がある。2006年3月以来、年少児(3~4歳)向けの「ほっぷ」、年中児(4~5歳)向けの「すてっぷ」、年長児(5~6歳)向けの「じゃんぷ」の3つのラインがあり、隔月毎に配送されている。2009年春には、就学前の3年間『こどもちゃれんじ English』の3つのラインをすべて受講し、早期英語学習を体験した第1期生が誕生した。今回の調査では、これら第1期生の英語力を測定し、早期英語学習者の英語力の実態調査を行った。

## 2. 調査概要

### 2.1 調査対象者

年長児79名。内訳は『こどもちゃれんじ English』を3年間受講し、自宅で英語学習を経験した子どもたち(以下「経験者」と略す)38名、そのような経験のない子どもたち(以下「非経験者」と略す)41名である。

### 2.2 調査方法

子どもの英語力測定のために、パソコンテストと、インタビューテストを行った。パソコンテストは、試験員が問題をクリックして提示し、受験者が解答する形態で行った。試験の指示は日本語で行われ、リスニングテストとスピーキングテストの2種類の問題があった。受験者はパソコン画面をタッチして解答した。

リスニングテストでは、単語とアルファベットの大文字の知識を測定した。一度で分かった場合も、再度聞いて分かった場合も、同等の扱いで正解とした。スピーキングテストでは、状況に合った英会話表現を口頭で言う英語力を測定した。答えられなかった場合は、試験員が誘導し、別画面で正解の英語を聞かせ、まねして言ってもらったが、この部分はテストの点数には加えなかった。

インタビューテストは対面式で、受験者1名が面接員1名と向き合って、英語で質問を受けた。面接員は、最初に日本語であいさつして打ち解けた雰囲気を作った後、インタビューテスト中はすべて英語を使った。質問の内容は3種類で、「自己紹介」の内容を答える

質問、“Do you like....?”の疑問文を聞いてYesかNoで答える質問、“What ... do you like?”の疑問文を聞いて好きなものを答える質問があった。

## 2.3 テストの作成と実施で配慮した点

### 2.3.1 解答方法に関して

- ①就学前の子どもたちは、通常、能力の測定に使われるペーパーテストを受けることがない。単語と文字の知識の測定のために、コンピュータのパネルをタッチして解答する方法を用いるパソコンテストを行った。
- ②パソコンテストでは、文字による解答が基本的に不可能であると考え、文字の代わりに選択肢として、絵を選択させることにした。絵が選択肢として適切なものになるよう分かりやすさに配慮した。
- ③集中力が持続するように、子どもにとって親しみのある絵を使うことにした。また、パソコンテストの「会話問題」では、英会話表現を、個別の脈絡のない形で提示して解答させるのではなく、子どもが普段過ごす1日の生活の中の複数の場面をストーリーの形で提示し、その時間軸上で提示して解答させるという手法をとった。

### 2.3.2 問題内容に関して

- ①英語が生活言語ではない日本では、英会話教室に通わず、園で英語活動を体験していない子どもの場合、自宅学習用通信教材による英語のインプットが唯一の英語学習ソースとなる可能性が大きい。したがって、教材で学習した内容を出題して、それをどの程度習得しているかを測定する「達成テスト」の要素が含められた。教材の主な内容のひとつに、英単語の語彙学習があり、子どもたちが学習した語彙は、就学前の子どもたちが日本語で習得する、年齢相応の認知力に対応したものとなっていた。パソコンテストでは、これらの英単語から、日本語でカタカナ語となっているものやそうでないものを選んで、その音を聞かせ、その音の意味に一致する絵を選ばせる「リスニング形式の単語認知問題」を作成した。
- ②「達成テスト」だけでなく、習得した知識や技術を運用できる域に達しているかどうか、学習の習熟度を測定する「実力テスト」の要素も含められた。パソコンテストのスピーキングテストでは、コンピュータの画面上の絵を見て、場面にふさわしい会話表現を発声することができるかどうか、イディオム的な英語の語彙の知識や状況を察知する社会言語的な知識を運用する力を測定するための「実力テスト」として位置づけた。インタビューテストは、自分でメッセージを作り、それを発声することができるかどうか、より高レベルの運用力を測定する「実力テスト」として位置づけた。

## 3. 調査結果

### 3.1 パソコンテストの結果と考察

### (1)全体の結果

経験者集団の方が非経験者集団よりも、全種類の問題で平均正答率が高かった。単語3択問題、単語シート問題、単語音声問題、大文字問題で明らかな有意差があった。経験者集団は、単語シート問題の正答率が非経験者の2倍以上だった。会話問題も、経験者の方が正答率は2倍以上あったが、両集団とも正答率は比較的低かった。経験者は教材を使用し、特に語彙学習に成果を上げているように思われる。

### (2)リスニングテスト：単語問題の結果

経験者集団の平均正答率は 71.1%、非経験者集団の平均正答率は 37.5%で経験者の方が高く有意差があった。

- ①単語3択問題：両集団とも、正答率が高く有意差がなかった単語は、英語の発音が日本語のカタカナの発音に近い単語であった。
- ②単語シート問題：両集団とも、正答率が低かったのは、英語が日本語では別の言い方をされている単語だった。これらの単語の有意差はあった。
- ③単語音声問題：集団間で有意差がみられた単語には、英語の発音が日本語のカタカナの発音に近い単語が一部あった。英語が日本語では別の言い方をされている単語の一部でも、経験者の正答率が高く有意差があった。経験者は、自宅学習によって、日本語とは異なる音の英語も着実に学習しているようである。

### (3)リスニングテスト：大文字問題の結果

経験者集団の平均正答率は 86.4%、非経験者集団の平均正答率は 68.5%で、経験者集団の方が高かった。しかし、両集団とも正答率は高く、その差も 17.9%と小さかった。アルファベットの大文字の知識は、非経験者にもあるようである。日常生活の中の看板や T シャツなどで見かけることが多いためだろうかと考えられる。

### (4)スピーキングテスト：会話問題の結果

- ①両集団に共通してもっとも平均正答率が高かった会話表現は“Good bye.”で、経験者の方が高かった。
- ②経験者集団の正答率が高かったのは他に、“Thank you.”、“I’m hungry.”、“I’m sorry.”だった。
- ③“Happy birthday.”と“Good morning.”は、両集団とも正答率が低く、有意差がなかった。

正答率が高い会話表現は、日本語の中でもカタカナ語として使われているものであることがわかる。経験者でも、お祝いの言葉や、特定の時間に限られた挨拶は意外と難しいようである。これらの言葉は、相手がいる特定の社会的状況の下で使われるものであり、知識として蓄えておくものではない。スピーキング活動、お祝いや挨拶など、相手がいなければ

ば使えない社会的な言葉の習得は、保護者に相手をしてもらうなど支援を受けて、意識的に練習する必要があるのかもしれない。

### 3.2 インタビューテストの結果と考察

#### (1)全体の結果

経験者集団の平均正答率の方が、「会話力」「語彙・文法力」「発音」「態度」のすべての評価項目で、非経験者よりも高かった。特に「発音」と「態度」では両集団に開きがあった。「会話力」と「語彙・文法力」に関しては、両集団とも正答率が比較的低かった。しかし、「語彙・文法力」は、経験者の方が非経験者よりも2倍以上、正答率が高かった。

#### (2)質問の種類別（「自己紹介」「Do you~?」「What~?」）結果

どの質問も、経験者の約5割が答えられた。自分に関する質問や、目の前で具体物を見せられての問いかけであれば、経験者の半分は返事ができる英語力があると思われる。自宅学習者は、パソコンテストだけでなく、インタビューテストでも、語彙力を発揮している様子が見える。

### 3.3 「園における英語活動経験の有無」によるグループ別結果

保護者へのアンケート調査により、今回の調査で対象となった子どもたちの園における英語活動経験の有無を確認することができた。この要因によって、次のようなグループ分けができた。

- ・ 自宅で英語学習を経験、園での英語活動有り
- ・ 自宅で英語学習を経験、園での英語活動無し
- ・ 自宅で英語学習の経験無し、園での英語活動有り
- ・ 自宅で英語学習の経験無し、園での英語活動無し

①自宅学習のみを行っている子どもたちは、語彙学習によって英語の耳が育ち、絵で示せるような事物を表す単語のレベルであれば、その意味を正確に認知することができるが、英会話表現を使いこなすことがあまり得意ではない様子が見える。園で英語活動をしており、英語の先生とインタラクションをする機会がある子どもたちも、場面に応じた英会話表現の発声は得意ではないようである。対人的に英語活動をしていても、一斉授業では、よりリアルなコミュニケーションの場面を作り出したり、1対1で発声練習する機会が乏しくなってしまうのかもしれない。

②インタビューテストでも、全ての評価項目において、経験者(園英語有)の子どもたちの平均正答率が高かった。自宅での英語学習と園での対人的な英語活動経験の相乗効果があるようである。「発音」に関しては、経験者集団と非経験者集団の間で有意差があった。園活動をしていなくても自宅学習をしていれば 82.0%、自宅学習と園活動の両方をしていれば 94.2%で、自宅学習経験者たちは、比較的良い発音をしていたといえる。「態度」

に関しても、グループ間で有意差があった。経験者の方が、質問に堂々と答えることができていることから、英語に触れることができ、英語に慣れ親しみ、自信をつけている様子うかがえる。流暢に英語を話すことができなくても、英語を話しかけられたとき、怖がらない態度が身につけていることは興味深い。

- ③インタビューテストの「会話力」に関しては、有意差が認められなかった。園で英語活動をしていなくても、自宅の英語学習で、ある程度単語の意味を理解する力が身につけているのに、英語で会話しなければならないスピーキングテストでは、その力を発揮することが難しいようである。会話力を発揮するには、自宅学習だけでなく、園などで対人的に英語活動をする経験が必要なようである。
- ④インタビューテストの「語彙・文法力」に関しては、経験者(園英語有)の子どもたちの平均正答率が67.3%で明らかに高かった。経験者(園英語無)の子どもたちは、自宅学習によって語彙力を習得しているが、その語彙を会話で使う経験をしていない可能性があり、知識を運用できなかつたのではないかと考えられる。知識を運用する体験ができれば「コミュニケーションのための英語習得」への道も開けると考えられる。

### 3.4 保護者アンケートの結果と考察

#### 3.4.1 保護者から見た子どもの教材活用

両群を通して、媒体としてもっとも活用度が高いのはDVDのようである。多様なメディアで構成される『こどもちゃれんじ English』のような教材の良いところは、子どもが自分の好みに合った媒体を選べてさらに活用できるという点だろう。

#### 3.4.2 保護者の子どもの英語力の向上に対する期待と小学校英語に対する態度

成績がもっとも良かった経験者の上位者グループの保護者は、就学前に子どもが習得すべきであると考えた英語力のレベルが、他のグループに比べて高めであり、子どもの英語力の向上に対して、より大きな期待を抱いていた。経験者で上位者の保護者は、産出能力の習得への期待があった。また、成績上位者の保護者は、小学校の英語活動に対しても「英語に慣れ、英語を聞く耳が育つ」など、全体的に好意的な態度を抱いている。

一方、成績が低くなるにつれ、保護者の子どもの英語力に対する期待は低くなり、小学校英語に対しても不安を抱く様子うかがえた。非経験者のグループで成績が低かった子どもの保護者たちは、「英語によって日本語の発達が阻害される」「英語によって子どもの負担が増える」と書いていた。このようなコメントは、英語にもっともよく触れている子どもたちの保護者からは、まったくなかった。上位者の場合、保護者と子どもの態度が、気持ちよく英語学習に向けられている。このように、正なり負なり、保護者の期待や態度が、子どもの英語力に及ぼす影響があることは注目に値する。

## 4. おわりに

今回の調査で次のことが分かった。

- ・就学前の3年間、自宅で学習用通信教材を使って英語学習した子どもたちの英語力は、単語とアルファベットの大文字の音声リスニングによる認知力の面で優れている。
- ・自宅学習によって語彙や文字の知識を増強することができても、スピーキング能力を高めるためには、対人的に英語を運用する学習の機会も必要である。

関連する先行研究のひとつに、Kuhl et al. (2003)による調査がある。この調査によると、DVD教材を見ているだけでは、子どもは外国語を習得できなかったが、社会的なインタラクションの中で習得できた。このことから、社会がハイテク化していても、人間の脳は意外と原始的であり、人間の学習は、人と人とのつながりの中で、ゆるやかに進む可能性があることを示唆している。

DVD教材を購入しても、ネイティブ並みの英語を話せない親とインタラクションしたところで、英語力は身につかないのではという憶測とは裏腹に、彼らの学習効果は、特に英語の単語および大文字アルファベットの認知力の伸びにあらわれていたことは興味深い。子どもと英語教材のコンテンツの間で能動的なインタラクションが可能になると、親が子どもと流暢な英語でインタラクションをすることができなくても、子どもの質問に日本語で答えたり、一緒に英語のゲームや会話のやりとりを楽しみ、子どもにとって有意義なインタラクションを結ぶことで、子どもの英語学習を支援できる可能性があると考えられる。

### 自身の考察

私が今回この論文を選んだ理由は、授業で扱った教科書を通して早期英語教育に興味を持ったからである。文字を読み書きするには早い幼児期でも、聞く・話すということに関しては、何かしらの重要な点があるのではないかと思った。今回の論文は通信英語教材の効果について述べられていて、的が絞られたものになっているが、それでも興味深い発見が得られたと思う。自宅で通信教材を使って英語学習した子どもたちの英語力は、単語とアルファベットの大文字の音声リスニングによる認知力の面で優れているということから、これはスピーキング力の発達にもつながるのではないかと考えた。音声リスニングによる認知力が優れているということは、英語の音をしっかり聞くことができているということであり、音が聞けているということはそれを発する力も向上させることができるのではないかと思った。しかし、この論文の考察でも述べられていたように、スピーキング力を高めるためには、対人的に英語を運用する学習の機会も必要である。英語を聞き取ることができ、発することができても、会話を作り上げるためのスピーキング力はやはり、人とのやり取りの中でこそ身につけることができるものであるのだと改めて気づいた。英語の音というインプットだけでなく、アウトプットもとても重要な役割を担っているのだと分かった。インタビューテストの結果で、英語学習経験者集団の平均正答率が全ての評価項目において非経験者よりも高く、特に「発音」と「態度」で両集団に開きがあったということは、とても興味深いと思った。発音に関しては、英語の音に触れる時期が早ければ早い

ほど、より良い発音になるということを示しているような気がした。これは、早期英語教育の大きなメリットになるのではないかと思う。伝えたいことを伝えることができるというコミュニケーション力には、やはり発音も重要なポイントであると思う。「態度」に関しては、両集団で開きがあったということが意外だと思った。幼いうちは、英語を話すことへの不安や恥ずかしさなどはあまりないのではないかと思っていたが、今回の論文からそうではないことが分かった。幼児期の頃からこのように態度に表れるということは、思春期の子どもたちにはそれがより顕著になって表れるのではないかと思った。

今後は、早期英語学習がスピーキング力とリスニング力にどのように影響しているかということ発音などの音声面と関連付けながら調べてみたいと思った。